



慶應義塾大学ビジネス・スクール

銀座・大人の学校

資生堂の意思決定課題

5

資生堂 [付属資料 1～3 参照] 会長の福原義春氏は、非営利組織「文化パステル」 [付属資料 4 参照] が開催している「銀座・大人の学校」に資金援助をすべきかどうか、またそうした場合、資生堂にとってどのような意味があるかについて、思いをめぐらしていた。資生堂は「文化パステル」が企画している1998年10月開催予定の「チャリティー・スコーレ・コンサート」には特別協賛として70万円の資金協力をを行う予定だが、1998年7月現在の時点で「銀座・大人の学校」に関しては協力していない。資生堂は活発な社会貢献活動で知られるだけでなく、近年では「プレ・シルバー」²セグメントへの関心を強めていた。

10

資生堂と「銀座」

15

企業人としての福原氏は、資生堂会長や日本化粧品工業連合会会長を務める一方、1990年以来務めている(社)企業メセナ協議会理事長や日本交響楽振興財団会長の肩書きで知られるように、文化芸術の支援に関心が強い人物である³。また個人的にも、彼の出身地は東京都中央区銀座であり、現在も銀座通連^{どおり}合会の会長を務めるなど、銀座との縁も深い。

資生堂は、創始者で薬剤師でもあった福原有信が我が国初の洋風調剤薬局である資生堂薬局を1872年に開業して以来、銀座と共に歩んできた。当時の銀座は、政府が西欧文明の窓口として開拓した新開地であった。銀座大通りには松、桜、楓の並木が植樹され、我が国で初めてガス街路灯が設置された。銀座の文化は、資生堂の商品と重なって認知され、資生堂が

20

1 資生堂に関わる記述は、「化粧品のブランド史」(1998年、水尾順一、中央公論社)および資生堂広報リーフレットを参考にした。

25

2 本論では、従来用いられている「老人」「高齢者」「シルバー」といった用語が一般的に65才程度以上で社会的な活動からリタイアした者を指してきたことを踏まえ、社会的立場や意識・行動の点で彼らとは大きく異なる、40代後半から50代の人々を「プレ・シルバー」層として捉えることとする。

3 福原氏に関わる記述は、Nifty-Serveの日外アソシエーツ人物データベースを参考にした。彼の著書には、「企業は文化のパトロンとなり得るか」(1990年、求竜堂)がある。

本ケースは、慶應義塾大学大学院経営管理研究科における特別実習の成果としてまとめられたものであり、経営管理に関する適切なあるいは不適切な処理を例示することを意図するものではない。本ケースの作成は、慶應義塾大学大学院経営管理研究科 和田充夫教授の指導のもとに、博士課程 碓 朋子が行った。

30

(1998年7月作成)

1888年に発売した我が国初の練り歯磨き「福原衛生歯磨石鹸」は銀座の文化を象徴するものとして捉えられていたという。

1902年には、資生堂は銀座に「ソーダファウンテン」を開業する。これは、ソーダ水とアイスクリームの製造・小売りを行う、ドラッグストア形式の店舗であった。後の「資生堂パーラー」である。この店舗は、欧米文化吸収に積極的であった当時の時流に乗り、文学作品にもたびたび登場した。以後資生堂は、1922年にそれまで冠していた「東京新橋」の地名を廃し、1989年に新コーポレート・スローガン「ヒトを彩るサイエンス」に変更されるまでの長い間「東京銀座 資生堂」と名乗るのである。現在でも資生堂は、本社はもちろん、ファッションブティック「ザ・ギンザ」やカルチャー・スペース「ザ・ギンザアートスペース」⁴を銀座に構えている。

「サクセスフル・エイジング」構想

資生堂では1989年から「サクセスフル・エイジング（美しく年を重ねる）」を提唱し、これを基本理念とした事業活動に取り組んでいる。活動当初は高齢者のみをその対象として捉えていたが、1996年に全ての人々を対象とした活動として捉え直し、「サクセスフル・エイジング」とは、人々が年齢や性別に関係なく、美しく健やかに年を重ねて、心豊かな生き生きとした人生をおくることと定義している。その活動としては、「サクセスフル・エイジング」のための商品やサービスの提供、蓄積してきた化粧行動がもたらす心理的効果に関する研究の蓄積や情報の発信等があげられる。具体的には、1989年から毎年開催している「サクセスフル・エイジング・フォーラム」、全国で開催されている「サクセスフル・エイジング・サロン」⁵、関連書籍の出版、テレビ情報番組「B-WAVE」の提供、ホームページでの情報提供などである。

「プレ・シルバー」市場

25 デヴィット・B・ウルフは著書「エイジレス・マーケット」⁶の中で、アメリカでは既にベビー・ブーマー世代がプレ・シルバー市場の中心的役割を担いつつあると指摘し、その対応の重要性を説いている。K・ディヒトバルトとJ・フラワーもまた著書「エイジ・ウェー

4 「ザ・ギンザ」内に開設されたスペースで、主にデザイン、写真、ファッションなどのサブ・カルチャーを中心とした展覧会を開催している。

30 5 地域の企業、団体、学校、グループなどの要望に対し、支社のビューティー・コンサルタントが中心となり開催されるセミナー。化粧生活を楽しくするためのヒントや知恵を紹介する。全国の支社単位で開催され、年間4300件、参加者数は約18万人。

6 「エイジレス・マーケット」（1996年、三浦文夫・吉田隆幸監訳、中央法規出版）

ブ」⁷の中で、「ベビー・ブーマー」がプレ・シルバーとなった時、現代で最も急成長の強力な購買集団を形成すると予測している。

我が国においても、状況は類似している。日本におけるいわゆる「団塊の世代」⁸は、現在の時点で50才前後の「プレ・シルバー」世代である。我が国の第一次「ベビー・ブーマー」である彼らの世代は、戦後日本の急成長を目の当たりにし、大量生産・大量消費の消費スタイルを取り込んだ家庭において成長をとげてきた世代である。また彼らは、第二次世界大戦後の民主化の中で育ち、アメリカナイズされた生活様式や価値観を育ててきた世代でもある。一般の化粧品市場がこの10年間で約1.4倍の伸び率なのに対し、「プレ・シルバー」世代の化粧品市場の伸び率は約1.8倍となっている。

「アクテアハート」発売

資生堂では上述のような社会状況を踏まえ、1997年1月、「プレ・シルバー」世代をターゲットとして「アクテアハート」ブランドを発売した [付属資料5 参照]。全8品目から構成され、価格帯は2500～7000円に設定した。ネーミングの語源は、「活動的な」「積極的な」「意欲のある」などの意味を持つactiveと、「愛情」「勇気」「気力」などの意味を持つheartである。ブランド・コンセプトは、「今も、そしていつまでも前向きに、好奇心や情熱を持って生きるアクティブな女性達を積極的に応援する」とした。

商品特徴は、女性ホルモンの働きに似た有効成分ヒオウギエキスを配合した点である。このエキスは、アヤメ科植物の根茎から抽出される成分で、保湿効果や消炎効果があり、従来生薬としても用いられている成分である。パッケージはレモン・イエロー色で、能書きの添付はせずその内容のみを見開きパッケージの裏に記入した。その文字は、通常の商品に比べかなり大きい。また、キャップも大きく握りやすくするなどの配慮もなされている。

1月21日からの販売実績は、当初の年間計画240億円を上回り、順調に推移している。資生堂が行った購入者調査によると、平均購入年齢は48.4歳となっており、そのうち45～49歳が全購入者の37%、50～59歳が全購入者の30%という内訳になっている。商品の認知経路は、31%が「テレビCMを見て」、同じく31%が「店頭で商品を見て」という内訳になっている。

「アクテアハート」のプロモーション

「アクテアハート」のテレビCMでは、「プレ・シルバー」世代の女性に共感されると思

7 「エイジ・ウェーブ」(1994年、田名部昭・田辺ナナ子訳、創知社)

8 一般的には、1946～1951年に出生した世代を指す。

われる同年代の山本容子、平野レミ、島森路子などをモデルとして起用している。キャッチコピーは、「美しい50代が増えると日本は変わらと思う」である。このコピーに関しては、資生堂内でも議論があった⁹。「50代以上の市場が広がっている中で、きちんとこの年代にメッセージを送る必要がある」。しかし、「年代を言うと売れない」という化粧業界のタブー的固定観念があった¹⁰。結局議論の末、「サクセスフル・エイジング」の基本理念ののっとり、

5 「年をとることは素晴らしい」という点を強調したコピーとなった。

上述した購入者調査の結果では、購入者のテレビCMの認知率は65%、好感度は63%となっている。「美しい50代が増えると日本は変わらと思う」というキャッチコピーについては、「魅力を感じる」が51%、「やや魅力を感じる」が20%という結果であった。また自由回答として、「50代になることに希望が持てる言葉」「モデルが自分たちと同年代であり、生き生きとしていることに共感を感じる」「40代、50代の女性に夢を与えてくれる」というような記入が目立った。

10

またテレビCMと並行して、小人数のホームパーティー形式による、「アクテアハート・パーティー」を全国で展開している。資生堂では、「プレ・シルバー」世代の女性達は「気の合った仲間達と気楽なおしゃべりを楽しみたい」という欲求を潜在的に持っていると考えている。そこで「アクテアハート・パーティー」では、5～6人の消費者に自宅でホームパーティーを開かせ、化粧品を自由に使用させたり、VTR「すてきに更年期」の鑑賞をしたり、楽しいお喋りをしたり、といった構成になっている。参加者からは、「前向きに生きることの大切さを感じた」「私たちにピッタリの商品を発見してくれた」などの声が寄せられている。

15

20

資生堂の芸術文化支援（メセナ）活動

企業のメセナ活動は、昭和40～50年代に第一次隆盛期を迎えた。その反面この時期には、冠コンサートなどの企業のメセナ活動に対して「過当競争になっているのではないか」あるいは「文化支援活動の衣を纏った企業の宣伝活動ではないか」などの辛辣な批評も浴びせられた。しかし福原氏が発起人の一人となった「企業メセナ協議会」が1990年に設立された頃から、企業のメセナ活動は新たな段階を迎えつつある。その社会的背景には、文化と企業のメセナ活動に対する社会からの評価と期待の高まりという時代の変化があり、企業の社会的意識の拡大がある¹¹。

25

30 資生堂は1989年3月に、新たな企業理念を策定した。「私たちは、多くの人々の出会いを通

⁹ 1998年4月27日「朝日新聞」

¹⁰ 1997年2月8日「日経流通新聞」

じて、新しく深みのある価値を発見し、美しい生活文化を創造します」というものである。この活動が目指すべき対象領域として資生堂は、美しい生活文化の創造につながる分野、資生堂の力が活かせる分野、社会全体あるいは地域社会のニーズ・問題を捉えた分野という三つの要件を考えている。資生堂はそのような活動を、広義の「社会貢献活動」として位置づけている [付属資料6～7参照]。実際に資生堂は、毎年経常利益の約3%を社会貢献活動に充てており、そのうち1/3を芸術文化支援活動に充てている。また、従業員のボランティアを含めた社会参加活動を支援する制度として、社会参加活動を勤務時間とみなす「ソーシャル・スタディーズ・デー」制度を設けている。

5

資生堂の社会貢献活動

10

資生堂では、社会貢献活動を次の三種類に区分している。第一は「社会還元」活動である。これには、資生堂が主催する学術シンポジウムやサイエンス・シンポジウム、社会福祉事業財団などの活動が含まれる。第二には、「福祉・地域貢献活動」である。これには、本社だけでなく全国に分散している販売会社において、企業市民として地域社会との関わりを深めていこうとするような活動が含まれる。この活動の一環として、各地の老人ホームでの美容講習会「身だしなみ講座」¹²の開催がある¹³。例えば、徳島県鳴門市の老人病院山上病院においてのこの様子は、1996年11月から資生堂のテレビCMで放映されて話題を呼んだ¹⁴。ここでは、高齢者の入院患者に化粧を施した結果、化粧を施された患者には高い割合で、表情が生き生きするなどの「表情の変化」、化粧をされることによって鏡を見る機会が増えるため「身だしなみへの関心度の向上」、「精神的安定」などの意識面・行動面での効果が見られたという¹⁵ [付属資料8参照]。このような活動の中から、化粧が老人性痴呆症の改善に効果があるという知見が得られ、資生堂研究開発本部では高齢社会における化粧品のあり方についての研究が進められている¹⁶。

15

20

資生堂の北東京支社に勤める横田美千子氏は、江戸川区の瑞江特別養護老人ホームでの美容講習会の講師を三年間ほど続けている。1998年3月23日の講習会には、同ホームの入居者とデイケアの老人も含め25人が参加した。参加者の一人をモデルに、横田氏は「下地作り」

25

11 「メセナ白書」(1991年、企業メセナ協議会)

12 この活動は、1949年頃より支社単位で行われていた活動が全社的に拡大したもので、現在では参加者は年間3万人にも及ぶ。

13 1997年には資生堂のこのような長年にわたる活動に対して、過去10年以上にわたってボランティア活動に取り組んだ企業を対象とした「ボランティア功労者に対する厚生大臣表彰」が与えられた。

30

14 1997年1月1日「日経流通新聞」

15 鳴門山上病院・辻喜美子総婦長「化粧と老人医療」研究会資料

16 1997年7月16日「日経産業新聞」

からファンデーションの塗り方、眉の描き方などを指導していく。「女性は年齢と共に眉が薄くなります。眉墨で女性らしく描いて下さい。」仕上げの口紅には、薄ピンクやワイン系の華やいだ色が選ばれる。横田氏は、「心から喜んでくださっているのが伝わってきて私の方が感激しています。」と語る¹⁷。

- 5 第三が、文化イベントの主催や協賛などの「芸術文化支援活動」である。古くは1919年に「資生堂ギャラリー」を開設して無名の若手芸術家たちに発表の場を提供して以来、現在までに、ミュージカル「レ・ミゼラブル」や「アメリカのジャポニスム展」などの支援活動の実績がある。資生堂の芸術文化支援活動は、企業文化部が中心となって推進している。支援の中心的基準は、「現時点で評価が定まっていないもの」「前衛的なもの」「実験的なもの」
- 10 かつ「コンテンポラリーなもの」という点である。これらに加えて「女性の表現活動や課題へのサポート」「歴史的に見て資生堂が共感してきた表現形式や美意識、それらに関する交流史として捉えられるもの」という観点、社会的文化的貢献度という観点、地域貢献度という観点などを総合して、支援を決定している。

15

「文化パステル」発足の経緯

私的「川口ファンクラブ」的組織

- 「文化パステル」事務局長の宇野弘恭氏によると、1986年当時、NHK放送総局長だった川口幹夫氏¹⁸は、局外の文化芸能人からの信望が非常に厚く、次期会長として彼を待望する声も強かった。もともとNHK局内では長い間、政治・経済を扱い政界人・財界人との太いパイプを持つ報道セクションと、文化や芸能を扱い文化芸能人¹⁹とのパイプを持つ非報道セクションはそれぞれ、各セクション内での結束が固く、セクション間での交流が若干滞りがちな傾向が見られたという。
- 20

- しかし後者のセクション出身である川口氏は、政治・経済と同様に文化・芸能をもまた重視する姿勢を見せ、バランス感覚に優れた人物であった。そのため次第に川口氏の周囲には、彼を信奉する文化芸能人達が集まってくることとなった。そして彼らの中で、自然発生的に、
- 25

17 1998年3月24日「朝日新聞」

18 1950年NHKに入局。1970年芸能局部長、1977年副総局長などを経て、1982年放送総局長に就任。1983年からは専務理事も兼任。1953年以来芸能一筋で、特に「紅白歌合戦」を20年間現場で指揮、「応援団」を取り入れ、「国民的行事」と呼んだ。「夢であいましょう」などの音楽番組を経て、1968年ドラマ部長、「土曜ドラマ」「ドラマ人間模様」などを担当し、放送作家を大切にするプロデューサーとしても知られた。1986年退局し、N響理事長となる。日本映画テレビプロデューサー協会会長も兼任。1991年NHK会長に就任。1997年7月退任。(Nifty-Serve：日外アソシエーツより)

30

19 本ケースでは、文化界・芸術界・芸能界で活躍する人々を一括して「文化芸能人」として扱うこととする。

「川口さんを応援しよう」という声が湧き起こった。いわば、私設の「川口ファンクラブ」の組織が形成されたのである。1991年に川口氏は会長に就任し、二期会長を勤めたのち、1997年に退任した。

川口氏は退任前日、局内で次のような挨拶を行った。「有史以来の世界の歴史を振り返ってみると、この地球には、大別して二つの民族が出現している。まず一つは、農耕民族である。農耕 (agriculture) は文化 (culture) に通ずる。もう一つは、狩猟民族である。狩猟とは、既にそこに存在する獲物をめがけ先を争い収奪してくるという点で、報道の本質と類似している。前者の労働は、時間がかかり、すぐには成果が見えない類の労働だが、社会全体を俯瞰すれば、人間形成にとって欠かすことができない仕事である。そしてつい最近になって、これら二つの民族のほかに、他人が生産したものを売買するだけで生業を立てている商業民族という新たな民族が台頭してきた。」

彼のいう「商業民族」とは、放送人としての使命感や責任感を放棄して、商業的関心から放送界に関わっている人々を揶揄した言葉である。この挨拶には、川口氏だけでなく、彼の価値観に賛同して集まった信奉者達が当時共通して抱いていた、政界人・財界人や放送界の現状に対する危惧、すなわち文化・芸能をないがしろにしがちな風潮に対する危惧、ひいては日本社会の前途に対する危惧が如実に表れている。

このような問題意識を受けて、1987年川口氏やその周囲に集まった文化人達を中心となり非営利組織「文化パステル」が設立された²⁰。事務局長の宇野氏の言葉によれば、「経済至上主義、拝金主義の現在の日本を、本当の文化国家にしようという意気込み」を抱く点で志を一つにした人々の「企画集団」であった。その後「文化パステル」は現在に至るまで、数多くのテレビドラマやドキュメンタリー番組、コンサートなどを企画してきた〔付属資料9参照〕。これらのイベントには、「文化パステル」の趣旨に賛同する文化芸能人達が出演料を度外視して格安のギャラで協力してきた。

「スコーレ」運動

しかし「文化パステル」の子どもの情操教育に関わる活動が本格化するのには、設立後約10年を経た1997年に入ってからのことである。1997年に入り「文化パステル」は、メディアを通じて社会に対して「スコーレ運動」を提唱し始めた。「スコーレ」(skhole)とは、ギリシャ語に語源を持ち、「余暇」「学び」「楽しみ」という意味を持つ。

「スコーレ運動」の中心的なコンセプトは、「勉強ができる子より、心豊かな子を育てた

20 1997年5月13日「朝日新聞」

い」というものである²¹。この運動は、設立以来「文化パステル」メンバー達が抱き続けてきた社会に対する抽象的な問題意識を、より具体的な社会的活動として再提示した活動として捉えられる。つまり漠然と現在の社会に対しての不安や不満を抱きそれを表明するだけではなく、具体的に問題点の焦点を教育に絞り、対策としての活動を社会に対して提案していくことによって社会を改善していこうとする、彼らの志向性の変化として捉えられる。

「スコーレ運動」のスタートを記念するイベントとして、1997年5月31日、東京銀座6丁目のTEPCO銀座館で、「文化フロンティア会議 '97」と銘打ったシンポジウムが開かれた²²。現在の「文化パステル」代表である大山勝美氏が司会を務め、パネリストは、元東京大学総長の有馬朗人氏、フランス歴史学者・上智大学教授のイザベル長谷川氏、スポーツライター・作家の玉木正之氏、タレントの所ジョージ氏、コラムニストの天野祐吉氏であった。また裏方として、人づてに聞いて参集した上智大学・慶應義塾大学・日本女子大学の有志学生数名が協力した。

会場では、教師やPTA関係者ら約100人が耳を傾けた。このシンポジウムでは、パネリストから現代日本における教育の問題点が指摘され、「自分で考えられない子が多いのは、効率一点張りの世の中で無駄を楽しむ心がないから」「社会全体でもっとゆとりを持つべきだ」といった指摘や提言がなされた²³。また1997年9月からは、「スコーレ・コンサート」と題した世界各国の音楽を紹介するコンサートを、各国大使館の後援のもとに、TEPCO銀座館ではほぼ毎月1回開催している。

20 「文化パステル」の組織

事務局スタッフ

「文化パステル」の活動において、非常勤スタッフやボランティア・スタッフの貢献は非常に大きい。しかしもちろん、事務局の専従スタッフ、すなわち局長である宇野氏および局員である田中美絵氏の2人がその中核として彼らを束ねている。宇野氏は、上述の「文化パステル」設立時からのメンバーである。

宇野弘恭氏は、活動写真（無声映画）の花形弁士であった故牧野周一（本名：宇野主一）を父に持つ。牧野氏は18才で弁士となり、洋画の恋愛ものを軽妙な語り口で盛り上げて人気を得た。戦後は漫談家に転向し、1974年紫綬褒章を受章した。牧野氏は「弁士になったのは、

30

21 1997年5月31日「文化パステル」主催「文化フロンティア会議 '97」配布資料

22 1997年6月1日「朝日新聞」

23 このシンポジウムの様子は、1997/09/05のNHK「金曜フォーラム」にて放映された。

楽団の演奏を身近に聴きたかったから」と語るほどクラシック音楽が好きで、戦時中山梨に疎開する際にも蓄音機と100枚以上のレコードを携えていったという。このような父の影響で、弘恭氏を含む牧野氏の三人の息子は、全て文化芸術界で活躍している²⁴。長男の功芳氏は、新星日本交響楽団を中心に指揮をとり、音楽評論家としても知られている。三男の故道義氏は、帝京大助教授や上智大講師としてドイツ文学の教鞭をとるかたわら、クラシック音楽の評論も著している。

5

次男である宇野弘恭氏は、少年時代、授業料滞納者として掲示が張り出された中学校から足が遠のき、新宿や上野の映画館や寄席に通いつめる日々を過ごした。小学生時代より、教室で漫談を披露していたという。ネタは、父である牧野氏の寢床に潜り込んで口伝えで仕入れた。父の付き人のような雑用をしながら、舞台に憧れていた。彼はインタビューに対し

10

「父に『漫談家の後を継げよ』と言われ、嬉しくてね」と語っている。大学卒業後はジャズバンドを組み、昭和30年代にはNHKラジオの人気番組「歌謡ホール」の編曲担当を務めた。彼はその後1979年から1986年の間、(社)虹の会という団体を主宰し、お年寄りが楽しめるようなイベントを企画し文化芸能人にノーギャラでの協力を呼びかけ老人ホームへの慰問等の活動を行っていた。後の「文化パステル」につながる問題意識は、その当時から抱き続

15

けてきた思いであるという。彼は「文化パステル」の活動を続ける中で、相当の自費をつぎこんできた。例えば昨年については、その額は数百万円にもものぼるという。しかしそのことによって例え私生活で贅沢な生活を送ることができないとしても、自分が楽しくかつ社会に貢献できる活動に関われることに、大きな満足を感じているという。

20

田中氏は大学卒業直後の1997年4月より、「文化パステル」事務局員を務めている。彼女は音大や美大への進学も考えたほど、もともと自ら文化を「生産する」タイプの活動が好きだったという。またその一方で、そういった文化活動の場を「アレンジする」タイプの活動にも興味があった。彼女は幼少時代、父親の仕事の関係で数年間をフランスで過ごしている。彼女はこの体験から、自らが「度胸」という収穫を得たと考えている。帰国後、それほど時間を経ずに日本社会や文化に適応することはできたものの、成長する過程において常に「日

25

本社会、特に教育はどこかおかしい」という違和感を持ち続けてきたという。

そういう中で彼女は、大学を通じて「文化パステル」の活動を知り、大学4年生の8月より週二回程度、学生アルバイトとして参加することになった。活動に参加し、事務局長の宇野氏と会話を交わす中で、「『文化パステル』は自分の適性、関心や問題意識とばっちり合っている」とびんと来たという。当時田中氏は、組織内部の実状などに関しては、全く理解し

30

24 1997年7月6日「読売新聞」

ていなかった。事務局員も多数いるものと思っていたという。ただ、彼女の知人が親しくしていたのが「文化パステル」代表の大山氏であったこともあって、「それほど怪しい組織ではないはずだ」と判断した。

5 アルバイトとして事務局の活動を支えた後に、事務局の専従スタッフとして就職した田中氏は、「宇野さんに騙された」と思ったという。アルバイトの時には見えなかった、「文化パステル」の「組織としての脆弱さ」が鮮明に見えてきた気がしたからである。また彼女の言葉によれば、「文化芸能のコミュニティの思考・行動様式で動いている」宇野氏と、それよりはより常識的な一般的コミュニティの思考・行動様式で動いている自分との間に横たわるコミュニケーション上のずれを痛感させられる出来事もしばしばあったという。

10 ただ現在、彼女は仕事の内容に関して、非常に満足とやりがいを覚えている。同世代の人々が覗き見ることが不可能なアングルから社会を見ている感じがするからだ。日々が新鮮であり、出会うモノ、出会うヒト全てに好奇心をかきたてられる毎日を送っている。ただ「文化パステル」の活動の一環として「銀座・大人の学校」などのイベントの企画や準備を慌ただしく行う生活の一方で、「何も考えずただそれが好きだというだけでピアノを一心不
15 乱に弾いている自分」と自己の存在も重要であり、大切にしていきたいと思っていると語る。

銀座通連合会

銀座通連合会は、1919年に創立された。銀座の表通りに面する店舗が加入対象の非営利の親睦団体で、現在の会員数は230、98%の加入率を誇る。銀座街頭のごみ問題から容積率緩和等の高度に政治的問題まで、銀座の共益に関する問題に広範に対応している。同会の設立
20 以前は銀座1丁目から8丁目までそれぞれ町会が分断され、銀座全体としての対応が求められる問題に対して統一的に取り組むというのは困難な状態であったが、明治天皇の遷座祭にあたり、町会を横断しての統合的組織が必要となり、機械工学を修め水道管事業を営み実業界で名を成した故森竹邦彦氏が音頭をとって設立に至ったという経緯がある。

25 初代会長には森竹氏（在任：1920-1929）が就き、現在の会長である福原氏（在任：1991-）は9代目である。連合会には、会長職と共に理事長職も設けられているが、前者は名誉職、後者は会員の選挙によって選出される。事務局長石丸氏の言によれば、前者は「天皇」的立場、後者が「総理大臣」的立場ということである。会員はそれぞれ、間口などから算出された数十万円から数百万円までの年会費を連合会に支払っている。事務局は、銀座・松坂屋の
30 道路を挟んで向かいにある雑居ビルのワンフロアを使っている。会議室には、「銀座憲章」の額が掲げられ、これには、以下のような文言が並んでいる。

- ◆ 銀座は創造性ひかる伝統の街
- ◆ 銀座は品位と感性たかい文化の街
- ◆ 銀座は国際性あふれる楽しい街

「文化パステル」事務局長の宇野氏と銀座通連合会事務局長の石丸氏を最初に合わせた人物は、資生堂会長であり銀座通連合会会長でもある福原氏である。だが石丸氏によれば、9代会長である福原氏用のスペースとして空けてあった机を転用して、1996年7月に連合会内に「文化パステル」事務局用のスペースを設けてしまったのは、石丸氏のほぼ独断であったという。またこの時期に彼は、「文化パステル」事務局専用の電話回線を引き、連合会の看板の脇に「文化パステル」の看板を用意した。それ以来、事務局員田中氏の給料を含む「文化パステル」事務局運営費は、銀座通連合会が負担している。

石丸氏は連合会での数十年に及ぶ経験によって、銀座にとって「有益なもの」と「有害なもの」を瞬時に嗅ぎ分ける能力が身についたという。彼はこの時の自らの判断についても、「『文化パステル』の存在および活動が、長い目で見て、銀座の街のためになりそうな匂いがしたから」と振り返っている。彼は、銀座という地の文化面での先進性を非常に誇らしく思っているのと同時に、それゆえに銀座が負うべき責務についても自覚している。すなわち、銀座の独自性を維持するためには、特に文化面で全国の先を行く存在であり続けなくてはならないという認識である。しかし彼は一方で、文化の育成には時間がかかることを十分に理解している。「文化パステル」に関しても、「すぐには結果がだせなくてもいい、長い目で見た時に銀座の雰囲気は何らかの彩りを加えられる存在であればいい」と考えている。

協力企業

1998年4月の第1回の「教室」から「銀座・大人の学校」の会場を提供しているのは、銀座6丁目にあるTEPCO銀座館である〔付属資料10参照〕。(株)TEPCO銀座館は、東京電力の100%子会社で、電気に関する展示によって、東京電力のPRを担当している。「見て触って理解できる」ような電気に関するハード面での展示のみならず、オリジナルに企画する各種イベントやカルチャー教室といったソフト面も充実している。企画部長である塩谷惇氏によれば、このように「銀座というコミュニティひいては不特定多数の客とのコミュニケーション装置」を提供することで、電気事業ひいては東京電力に対する理解者を増やしていくことを目的としているという。

「銀座・大人の学校」に関しては、(株)TEPCO銀座館は「文化パステル」と共に「主催」として参加している。もともと、自館のオリジナル企画以外のこういった企画への

協力に関しては、その都度、その企画の持つ時代性、いい意味での注目度ないし話題性、銀座らしさ、日本文化への適合度、向社会性などの点を考慮して判断しているという。また当然、東京電力のイメージを傷つけないイベント、および東京電力の公共事業的性格という点から、限定され固定化された層ではなく不特定多数とのコミュニケーションがはかれるイベントという点にも配慮している。今回の「銀座・大人の学校」への協力に関しては、その活動趣旨への賛同や銀座というコミュニティ文化への貢献という点も考慮したという。

TEPCO銀座館がこの地にオープンしたのは、1996年10月のことであった。塩谷氏によると、銀座という地を選んだ背景には、明確な戦略的意図があったという。第一に国内の情
報的集約地および発信地であること、第二に地域にハイセンスな文化が根ざしていること、
10 第三に国内外の政治経済文化の中心地であることの3点である。この結果、銀座発の情報は、
様々なコミュニケーション経路を通じて、国内外に伝達される。このような情動的ネットワーク
を効率よく活用できる地として銀座が選ばれた。このような意図から(株)TEPCO
銀座館は、オープン以来、銀座という地域コミュニティに溶け込もうと努めてきた。

そういった地道なコミュニケーション努力の中で塩谷氏が知り合ったのが、銀座通連合会
15 事務局長石丸雄司氏であった。塩谷氏は、石丸氏はこのコミュニティの中での一種の「名士」
であり、コミュニティにおける情報の集約者であり、コミュニティ文化の醸成に対して関心
が高い人物であると感じた。塩谷氏は石丸氏と折りにふれ接触して世間話等をする中で、
「文化パステル」事務局長宇野氏を知る。その活動内容や趣旨に関心を覚えた塩谷氏は、そ
れから石丸氏の紹介で宇野氏と面会する。それから一年以上に及ぶ相互の話し合いの中で、
20 「銀座・大人の学校」でのタイアップ実現に至った。

(株)TEPCO銀座館において「銀座・大人の学校」の応募者との窓口として事務作業
にあたっているのは、企画部である。現在はやや落ち着いているが、4月や5月に新聞やラ
ジオ等のメディアに「銀座・大人の学校」が取り上げられた当初は、参加希望者からの問
合わせの電話への対応などで館員総動員の状態であったという。また企画部は、「授業」の
25 当日には、会場設営、講師接待、参加者受付などの作業を「文化パステル」と協同で担当し
ている。また「銀座・大人の学校」の運営に関わる費用は、(株)TEPCO銀座館が負担
している。

協力している文化芸能人たち

30 現在協力している文化芸能人は、多ジャンルかつ多数にわたる[付属資料11参照]。彼ら
を束ねているのは、演出家の大山勝美氏である。彼はTBSに入社後、一貫してドラマの演
出・製作にあたり、数々の話題作を手がけてきた。有名な作品としては、「岸辺のアルバム」

「ふぞろいの林檎たち」「蔵」などがあげられる。TBSを定年退職後、現在では「文化パステル」代表のほかに（株）カズモ代表取締役社長などを務めている。

大山氏は「文化パステル」における自分の役割を、「大きな意味でのまとめ役」と認識している。彼によれば、「文化パステル」のような非営利団体においては、通常の営利団体と異なり、所属する個々人が志だけを一つにしてゆるやかな連帯をなしている。そのような中において、他の人々を「リード」するのではなく、「調整」することが重要であると考えている。

大山氏が「文化パステル」の設立に参加したのは、その趣旨に賛同したという理由は当然であるが、彼の言によれば長年放送に携わってきた中で培ってきた対人的ネットワークのためという面も確かにあったという。また、人生の長い時間をマス・コミュニケーションとしての業務に関わって過ごしてきた中で、最終的な受け手の顔が見えないことに一種の欲求不満を感じてきた。コミュニケーションの送り手と受け手とが膝と膝とをつきあわせて接することができるような機会、換言すれば対面的コミュニケーションの必要性というものを常に感じてきたという。また民間放送であるTBSに長く身を置く中で、現在の日本のマス・コミュニケーション業界には、文化的活動に対する考慮や関心が欠如していると痛切に感じさせられてきたともいう。このような要因が自分を「文化パステル」設立へと動機づけたと、大山氏は自己分析している。

「銀座・大人の学校」

「銀座・大人の学校」は、「文化パステル」に参加するコラムニスト天野祐吉氏が提唱し、校長を務めている。「文化パステル」は「スコール運動」を進める中で、「楽しく学ぶことは遊ぶこと」と唱え家庭での情操教育の重要性を社会に対して訴えてきた。そんな中、日本ではこの数年悲惨な少年事件が多発するといった社会状況があった。これを契機として天野氏は、「大人の学校」の設立を提唱した²⁵。彼の心には、「人間の生活において、遊びは労働と同じくらい必要。けれど日本の近代化と共に、大人の成熟した遊びの文化は周辺に追いやられてきた。その結果現在では、日本の社会全体に遊びがなくなって、大人も子どもも窒息しかかっている。子どもが変わるためには、その前にこの国の大人が変わらなくては。」という思いがあった。そこで天野氏は、「大人の学校」の校則を「よく遊び、よく遊べ」と決めた²⁶。もともと「文化パステル」の活動拠点であることから、彼はこの地の特性、すなわち音楽、美術、演劇、映画など様々な文化的活動空間があるという点に着目し、最終的

25 1998年4月19日「毎日新聞」

にはこの街全体を一つの学校にしたててしまおうと考えている²⁷。

「銀座・大人の学校」は、主催が「文化パステル」および（株）TEPCO銀座館、協力が「銀座通連合会」という形でスタートした。定員は各回100名、参加費は各回1000円プラス若干の「実習費」である。一回の「授業」は、およそ2時間である。なお、会場となるTEPCO銀座館は、ウィークデーには自館オリジナルの企画が既に相当入っている。従って、基本的には「銀座・大人の学校」の開催曜日は、TEPCO銀座館のスペースに余裕がある土曜日と決定された。

各回定員のおよそ半数は、全6回の「授業」通しの参加者であり、残りの半数は各回限定で募集している。通年参加者希望者は、「文化パステル」事務局に「私の学校」と題した400字のエッセイの提出が義務づけられ、その中から抽選で選ばれている。年間受講を希望して事務局に「エッセイ」を送ってきたのは、4月に43人、5月に79人であった。5月分の応募者からは17人が選ばれ、これに4月の43人を加えた総勢60人が、年間受講者として決定された。さらに一回限りの単発の参加者が各回70~80人加わり、結局毎回の総参加者数は130~140人程度という予定であった。

15

第1回の様子

1998年4月18日土曜日14:00、中央区銀座六丁目にあるTEPCO銀座館で「銀座・大人の学校」第1回目の「授業」が開催された。それ程広くはない会場は、約1300人あまりの応募者から選ばれた130人あまりの受講生で埋め尽くされ、各メディアからの取材スタッフも詰め掛けていた。受付には、抽選にもれた応募者がそれでも参加したい旨を直訴し、事務局のボランティアスタッフが対応に苦慮している光景も見られた。受講者の年代は、大学生から60代までと幅広く分布していたが、性別としては女性が大半を占めていた²⁸。全体に華やかな装いの参加者が多く、なかには着物で参加した女性も数名見かけられた。

第1回の講師は、映画評論家の淀川長治氏であった。数日前に自宅の風呂場で足に火傷をしたという淀川氏は、車椅子に乗った姿で会場に現れ、参加者からは悲鳴に近い驚きの声が上がった。テーマは、「映画はぼくの学校」。淀川氏は「シェーン」や「駅馬車」「アラビアのロレンス」など多数の名作を取り上げ、「映像の持っている『話芸』を楽しめる目を見る側が持っていないと、映画の面白さは半減してしまう」と話した。退場する際には、参加者からのリクエストに応じて、「サヨナラ、サヨナラ、サヨナラ」と言いながら手を振って去

30

26 1998年4月6日「朝日新聞」

27 1998年4月10日「朝日新聞」

28 1998年4月19日「朝日新聞」

っていく淀川氏にいつまでも拍手が鳴り止まなかった。

第2回の様子

1998年5月23日土曜日、「銀座・大人の学校」第2回目の「授業」が開催された²⁹。テーマは「江戸に行こうよ」、講師は落語家の立川志の輔氏であった。この回は、前半の「講義」セクションと後半の「実演」セクションとの二部構成になっていた。会場には小さいながらも高座が設営され、立川氏はその上に座り、身振り手振りを交えながらの熱演であった。会場からは笑いが絶えず、参加者の笑い声が会場外にも聞こえてくるほどであった。

第3回の様子

1998年6月13日土曜日、「銀座・大人の学校」第3回目の「授業」が開催された。テーマは「なんで絵をかくの?」、講師は版画家の山本容子氏であった。山本氏の版画は、構成力と色使いに優れ、洒脱で洗練された雰囲気を持つと評価されている。彼女は以前より、油彩や水彩、エッセイ集、絵本、アクセサリー、壁画など多ジャンルで精力的な活動を行っており、私生活を女性誌がインタビューするなど、同世代の女性からの関心が高い芸術家の一人である³⁰。彼女は「アートをもっと身近に感じてほしい」という願いを持ち、書店も一つのギャラリーであると捉え、吉本ばなな「TUGUMI」や集英社「世界の文学」シリーズなど数多くの書籍の装丁、挿画なども手がけてきた³¹。

この回は、「銀座・大人の学校」の校長である天野氏と講師の山本氏の対談方式で進められた。会場には山本氏の最近の作品（複製）が三点かけられ、会場に華やかさを醸し出していた。ただ今回も130名あまりに当選状を送付していたものの、30名程が欠席し、会場にはやや空席が目立った。

29 筆者はこの回から、「銀座・大人の学校」の学生ボランティアとしての参与観察的な関与を始めた。第1回は、観客として会場で観察していた。

30 集英社「メイプル」1998年7月号

31 「ギンザ・グラフィック・ギャラリー-第145回企画展 山本容子展-オペラレッスン-」リーフレット

「文化」を消費する参加者

参加希望者のエッセイ

「銀座・大人の学校」への通年参加を希望して1998年4月に「文化パステル」に寄せられた42通のエッセイの中から典型的なものをいくつか紹介する³²。

[希望者A：女性50代]

終戦の年に満五歳でしたので古き佳き銀座をよく憶えています。伯母達が、新橋、銀座に居りましたので、従姉達と浜離宮や演舞場辺りで夕日が沈むまでよく遊びました。銀座通り
10 にくると、私達はすまし顔になり立田野の小倉アイスを食べたものです。中学、高校生になっても、遊ぶ場所は銀座でした。大人っぽい顔をしていましたので、大人に怪しまれず、友達を引き連れては銀巴里に足繁く通いました。岸洋子さん、小海智子さん、勉さん（苗字を失念）のシャンソンが好きで、小説にはない詞に感動して、日光荘の小さいスケッチブックに詩など書いていました。

15 デートも映画も銀座でした。少いお金で贅沢な気分を味わえるのが唯一銀座でしたから。今は月に一度は、いちばん好きな格好をして銀ブラをするのを楽しみにしています。隣に兵庫県生まれの自称ダンディがいますが、大きな顔をして案内するのは私です。

[希望者B：女性年齢不詳]

20 娘より知らされ、つたない筆を執りました。「大人の学校」という言葉のひびき、又、学ぶということへ久し振りにときめきを感じております。生徒にさせていただきますことを心より願いつつ…よろしくお願い申し上げます。（少し手を痛めましたので、筆ペンで書かせていただきました。）

25 私の学校は母です。大正に生まれ、戦中、戦後の混乱期を生き、子供のため一筋に駆け抜けたような六十二才の生涯でした。

三十代という若さで父を失い、それからは子供の成長を生き甲斐として、再婚もせず、女手ひとつで三人の子供達を、立派に育てあげてくれました。

「千万人のひとに千万人の母あり、わが母に勝る母なし」という言葉がありますが子供ごころに私の目に映った母の記憶は常に明かるい笑顔で、たくましく日々を一生懸命に生きてい
30

32 テーマは「私の学校」。制限字数は400字である。基本的に誤字脱字と思われる部分も、原文の通りとした。

たという誇らしい姿そのものでした。その母がこの世を去ってはや二十三年…私も家庭を持ち三人の子供達の母親となり、それぞれが成長を遂げて、ほっと人生を振り返えるようになった今、どれほど今日までねそんな母に、日々、あらゆる場面において、良き指針を与えられてきたかをあらためて思い、その娘として生まれた幸せを心からかみしめています。

これからも私の命ある限り、

学び続けてゆく学校、卒業することのない学校、それは母なのです。

5

[希望者C：男性50代]

「私の学校」は、人との出会い、そして付き合いです。一昔も前、大学受験に失敗し、大阪から「人生至る所青山あり」の電報を打ち、足摺岬の旅館に転がり込みました。しかし、警察からの通報で引き戻されてしまい、家業手伝い、病気、受験、大学入学、就職と続きますが、その旅館の息子の就職、長女の娘さんの婿選びと、今だに縁が続いていますし、病院、予備校、大学、職場内外等、出会った人々から驚きと共に考え方を学びながら、今日でもお付き合いさせて戴いています。

10

長く付き合う秘訣は、嘘を付かない、約束を破らない、自慢しない等にあると思いますが、より重要なことは相手の立場に立って耳を傾ける事だと信じています。

15

これまで、何とか人生を無事に過ごしてこられたのは、出会った多くの「学校」で人に助けられてきたお陰です。

既に、六〇に手が届く年齢になっていますが、新しい「学校」に胸が膨らんでいます。

20

[希望者D：男性40代]

中学、高校と六年間を過ごした学校に、長男も通い始めている。私が九回生、息子は四十三回生ともなれば、受験も厳しさを増しており、塾通いの三年間は、妻にとって気の休まらない日々だったらしい。入試が終わった途端。<キャー、こんなに白髪が増える。>と大騒ぎであった。

25

しかし、そんな親の苦勞を知ってか知らずか、息子の中学生生活は実にのんびりしたもので、ぐうたら寝てばかりいるものだから、やたら背と足ばかり大きくなっていく。背はこの前の夏に妻を負い越し、靴のサイズもとうに私を追い抜いている。その昔、沿線の女子学生に評判だった紺の制服も、あつと言う間につんつるてんになりそうだ。

この三十数年間の間に、すきま風で埃だらけだった木造の校舎も、冷暖房完備の鉄筋三階建に変わったが、居心地の良くなった分だけ呑気な顔が並んでいるように見えるのは僻目だろうか。

30

今朝もまた、四十三回生が出かけて行く。
<おい、衿のホック、はずれてるぞ。>

[希望者E：男性60代]

5 「私の大学」は街である。とりわけ、銀座である。

十五歳で結核に。十七歳で辛くも生還。就職し定時制高校に通った。学校は新宿にあり。職場は神保町に近く、仕事で銀座に出ることは毎日だったから、この三つの街に多くを学んだ。新宿からは「反抗」を、神保町からは「知の楽しみ」を、銀座からは「大人」を。

例えば、帽子。わたしはべつだんハゲているわけではないが、四季に帽子を愛好する。それは銀座の大人たちに出会わなければ知り得なかった楽しみだ。酒の飲み方もそう。自分の金で、背筋を伸ばして、味わって、と教えてくれたのは銀座の大人だ。今になって、それは貴重な勉強であったのに気がつく。年を重ねるごとに新宿は遠い街になっていく。神保町は今も飽きずに通い続けるが、五十を過ぎてから銀座が最も親しい街になった。

今、夜毎銀座に出る。脂粉の香りは敬遠。自分の金で、背筋を伸ばして酒を飲む。若い女性とデートする。十七歳から四十五年、だが「わたしの学校」には未知がいっぱいである。

参加者の満足

「銀座・大人の学校」第1回の参加者に対して実施した調査の結果から、参加者の満足についての質問項目に対する自由回答のうち、典型的なものを以下に提示する。

20

[参加者A]

肉声に触れることができ、最高でした。年齢に関係なく、「情熱」的なお人柄に励まされる思いがしました。

25 **[参加者B]**

淀川さんはやはり最高です！ お話を伺っている間中、幸せな気分になっていました。会場について：演壇が低い！ 淀川さんのお顔が見えなかった。前からたった3列目なのに…。

[参加者C]

30 すばらしい2時間でした。天野校長のユニークなご挨拶に始まり。淀川先生のすばらしいお話。その記憶力には感服しました。5才下の小生ももっと頑張ねばとつくづく思いました。ありがとうございました。

[参加者D]

「かくも長き不在」のお話は素晴らしかったです。少しでも理解できますよう。これからも映画は月に2本を目指して、楽しみたいと思います。足の火傷を早く治していただいて…心からお祈りしています。この企画はこの世の中に不思議な程、最高でした。

5

参加者の属性

「銀座・大人の学校」第2回の参加者に対して実施した調査³³の結果から、参加者の基本的属性についてのデータを以下に提示する³⁴。参加者の性別（表1参照）、年齢（表2参照）、学歴（表3参照）³⁵、職業（表4参照）、世帯収入（表5参照）は、以下の通りであった。

10

表1 参加者の性別 (%)

男性	女性
27.6	72.4

表2 参加者の年齢 (%)

～20代	30代	40代	50代	60代	70代～
0	4.7	21.9	40.6	26.6	6.3

15

表3 参加者の学歴 (%)

中学校	高校	短大	大学
1.6	28.1	28.1	42.2

20

表4 参加者の職業 (%)

専門職	管理職	事務職	販売職	自営業	作業職	無職	主婦	DKNA
15.6	12.5	6.3	6.3	12.5	1.6	10.9	31.3	3.1

25

表5 参加者の世帯収入 (%)

0～400万	400～600万	600～800万	800～1200万	1200万～	DKNA
18.8	10.9	14.1	21.9	26.6	7.8

33 1998年5月23日に会場自記式質問紙調査で実施した。対象者は「文化パステル」主催の「銀座・大人の学校」第2回参加者101名であり、回収率は98%であった。ただし、以下の分析で用いているのは、回収票のうち「子供あり」の64名である。

30

34 なお各表中の「DKNA」とは、「わからない」や無回答であった回答者の比率である。

35 ただし在学中や中退も含む。「短大」には、専門学校・高等専門学校も含む。

参加者の動機

「銀座・大人の学校」第3回の参加者に対して実施した調査³⁶の結果から、参加者の動機についての質問項目³⁷に対する自由回答のうち、典型的なものを以下に提示する。

5

- ・知識を増やし、視野を広げる為。(女性・50代)
- ・教養を高めるため。(女性・60代)
- ・出来るだけ心を遊ばせたいからです。(女性・60代)
- ・たのしい時間を持つことが最大の理由です。(女性・70代)

10

- ・有名な文化人のお話をお聞きすることによって、何かしら吸収出来たり得られるところがあると思いますので。(女性・40代)

参加者と周囲の他者との間の影響

「銀座・大人の学校」第3回の参加者に対して実施した調査の結果から、参加者への他者からの影響について尋ねた質問項目³⁸についての自由回答のうち、典型的なものを以下に提示する。

15

- ・オカミさんは賛成しかつ参加することをすすめている。(男性・60代)
- ・友人に誘ってもらったり、又逆に誘ったりしながら互いに向上しようとしております。(女性・60代)

20

- ・友人に誘われて参加しました。月1回でも自まできます。(女性・60代)
- ・むしろ私自身が影響を与えている。(女性・70代)

25

- ・友人とお互いに情報を交換している。(女性・40代)
- ・家族はとても協力的です。その為にも、がんばって、楽しみをたくさん作っていこうと思います。(女性・50代)

- ・異なる考え方を持つ人々に接する事で刺激を受け、自分に励みになります。(男性・60代)

30

³⁶ 1998年6月13日に会場自記式質問紙調査で実施した。対象者は「文化パステル」主催の「銀座・大人の学校」第3回参加者98名であり、回収率は82%であった。

³⁷ 「あなたが『大人の学校』のような文化的催しに参加するのは、なぜですか。ご自由にお書き下さい。」という項目である。

³⁸ 「あなたが『大人の学校』のような文化的催しに参加する際に、周囲の方々から影響を受けますか。ご自由にお書き下さい。」という項目である。

- ・周囲に影響を与えているようで、友人が参加したいと言いつけています。
(女性・50代)
- ・私は、幸いに、文化的なものが大好きな友人が多く、展覧会、講演会、音楽会、演劇など、情報持ち合い、券の入手に協力し合うのです。(女性・60代)

5

参加者の銀座のイメージ

「銀座・大人の学校」第2回の参加者に対して実施した調査の結果から、参加者の銀座に対するイメージについての自由回答のうち、典型的なものを以下に提示する。

10

- ・時代の最先端、専門店、伝統ある店、趣味追及の場、文化の場 (男性・50代)
- ・ゆったり買い物ができる。自分のほしい物見たい物が多いので好きです。
(女性・40代)
- ・大人の遊べる街、プライドのある街、ふところの深い街。(女性・30代)
- ・品格、さらっとした都会、気取らない江戸っ子気質も併せ持つ。最新のセンスを伝える店舗、町並、変わらない老舗の存続による安心感、信頼感、温かさ。最新情報発信基地。(女性・50代)
- ・物価が高い、気取っている。(女性・50代)
- ・レベルの高い専門店、人も、ものも、建物も、空間も、大人の少ない盛り場が多いが、大人の街という気がする。(女性・50代)
- ・大人の街、上品、洗練、美、知、遊、楽。(女性・50代)

15

20

参加者の「大人の学校」への希望

「銀座・大人の学校」第2回の参加者に対して実施した調査の結果から、参加者の「大人の学校」への希望についての自由回答のうち、典型的なものを以下に提示する。

25

- ・毎月1回年に12回開講してほしい。ずっと長く続けてほしい。(女性・60代)
- ・講師vs生徒、生徒vs生徒の交流拡大。(男性・60代)
- ・一方的講演なので皆が参加している気分が味わえる時間を作って欲しい。例えば30分前の待ち時間を有効に。(女性・50代)
- ・抽選ではずれるのは残念です。(女性・60代)

30

- ・出席する人が、女性が多く男性が少ないように思う。もっと働きざかりの男性が来れたらと思います。(女性・30代)
- ・継続受講料アップしては如何(女性・70代)
- ・何らかの形で参加(又は実習?)が出来るとな(男性・50代)
- 5 ・修学旅行を企画して下さい。(女性・30代)
- ・今回の申込み、夫と申込みを致しましたが、夫は選にもれました。夫婦の場合、両者とも参加出来ますよう、お願い致します。(女性・50代)
- ・今回初めての出席ですが、色々の分野に渡り、出会いを期待している。(女性・50代)
- 10 ・志の輔さんと寄席と一緒に、というのをとても楽しみにしていたのですが…山本容子さんと画廊に、というのも夢でしょうか。(女性・50代)
- ・回数を連続してふやしていただき、多くの人が参加できるようにしてほしい。(女性・40代)
- ・質議というより、それぞれの意見を発表する場があるといいと思います。時間がなければプリントにするとか。皆さん何を考えているのか知りたいです。「その日のテーマ」からそれないしつもんはむずかしいと思います。(女性・20代)
- 15 ・こういう集まりをもっといろいろな企業が賛同して開いてくれているいろいろチョイスできればとても楽しみが増えると思います。(女性・40代)
- 20 ・一寸申し上げにくいですが男性ももっと加わることが望ましい。(男性・70代)
- ・このような企画を他の電気館でもやってほしい。(女性・40代)

「文化パステル」の今後

25 現在の問題点

宇野氏は、長年「文化パステル」の活動に関わる中での苦勞として、文化芸能人に特有の意識や行動様式に伴う組織的・対社会的苦勞をあげている。組織的な観点では、活動に参加協力している文化芸能人間の調整の困難という点である。宇野氏によれば、もともと彼らは組織に所属して決定主体の意思に従って行動する、あるいは何かの目的のために周囲の人々と協調するというような行動様式にあまり慣れていない。つまり「個」としての自分という意識が一般の人々に比べて強固なのである。また自分自身の能力やセンスに対する信念も強固である。しかし宇野氏は、常に自分自身が納得できる最高のモノを作り提供したいと希求

する文化芸能人の論理と、それを支援するスポンサー企業の背負っている論理との間に立って、通訳ないし調整役としての機能を果たすのが、プロデューサーとしての「文化パステル」の存在意義だと考えている。

事務局員の田中氏や代表の大山氏もまた、非営利団体として存在することに起因する本質的ジレンマを指摘する。すなわち、運動を続けていく上での組織力という体力の問題である。5
メンバー個々の目的や志は純粹で活動への意欲は充分すぎるほどに持っているながらも、組織として動員できる資源、特にここでは金、ヒトが非常に限定されているという点である。「文化パステル」事務局は、「スコーレ」運動や「大人の学校」の意義を限定的にアピールしていただくでよしとするならば、現在の資源で問題ないと考えている。しかしもっと広範に社会に向けてこの活動を広報し普及させていくためには、やはり資源が不足していると考え10
ている。

さらに田中氏は、「文化パステル」メンバーの高齢化について懸念している。現在のメンバーは確かに、文化芸能界において一流の貢献を成してきた人々ばかりである。ただこの先、次世代を担う有望な人材への事務局活動のバトンタッチがスムーズになされなかった場合、活動そのものが先細りになってしまう危険がある。田中氏はこの面において、宇野氏の対人15
的ネットワークの広さ、および「銀座村塾」の活動の展開を契機として優秀な人材が「文化パステル」に加わってくることを期待している。

TEPCO銀座館の塩谷氏も同様に、文化芸能人の間での調整の困難さと共に、現在の時点での「文化パステル」の組織としての基盤の弱体性をあげている。すなわち、活動の趣旨は非常に立派であり共感もするが、そういった理想次元での議論とそれを可能にする現実と20
の乖離が大きくなりつつあるのではないかと指摘している。

銀座通連合会の石丸氏も同様の点を懸念している。すなわち、この一年余りの短期間で「文化パステル」の活動が急激に展開を見せたことに対する嬉しい悲鳴のような心配である。一般への認知度が高まり、活動が盛んになってきたことに対しては嬉しく思っているが、連25
合会としては事務的なサポートがどこまで可能かという点については不安に感じているという。さしあたっては彼は、「文化パステル」事務局のスペースが手狭になってきていることに対しての対応に苦慮している。何か抜本的対策の必要性を感じており、一つの大きな転換点にさしかかっているとの認識を持っているという。

今後の活動の展望

「銀座・大人の学校」は、今年度中に残り3回の開催を予定している。ただし第4回以降は、その時期にTEPCO銀座館が一部改修を予定しているため、会場を銀座の別な場所に

移して開催される予定である。講師およびテーマの予定は、第4回が「芝居のウソとホント」を歌舞伎役者の中村吉右衛門氏、第5回がイッセー尾形氏、第6回が「ことばあそびを遊ぶ」を詩人の谷川俊太郎氏が担当し、行われる予定となっている。

ただ田中氏は、「大人の学校」の参加希望者が定員の数倍にも及んでいるにも関わらず、
5 現在の時点での事務局の能力では、その大半を取り込めないままであることを心苦しく思っている。現状のまま応募者を断り続けるという状況が続けば、期待が大きかっただけに彼らの失意もまた大きくなってしまいう可能性があるからだ。

10月には、「スコレ・コンサート」の特別版として、「チャリティー・スコレ・コンサート」が予定されている [付属資料12参照]。これは現在の時点で、主催が日本赤十字社・
10 銀座通連合会・「文化パステル」の三者、後援が各国大使館、そして特別協賛として資生堂およびTEPCO銀座館が名を連ねることが予定されている。

また近々、将来文化芸能分野で活躍できるような人材作りを意図し、川口氏を講師、「文化パステル」に関わっているボランティアの女子大生有志を主な生徒とした「パステル銀座村塾」の開講も予定されている。この背景には、宇野氏の以下のような考えがある。すなわち、文化や芸術・芸能は、政治・経済同様、社会の構成員に対して多大な影響力を及ぼす、社会的活動の一つである。従って次世代の人々のために、我々の社会の経済力ならぬ「文化力」を向上させるような、文化のニューリーダーの育成を考えていかななくてはならない。宇野氏は、このような人材の新鮮で柔軟な発想や活動的エネルギーが、新しい、よりよい社会の流れを作り出していく原動力になっていこうという期待を持っている。

20 さらに「銀座・大人の学校」とは別に、銀座界隈を舞台とした「美術教室」「お芝居教室」「音楽教室」の開講についても、現在準備が進行中である。宇野氏は、「銀座・大人の学校」を含めた「文化パステル」の行っているイベントと類似した催しは日本中に無数にあると指摘する。その中で「銀座・大人の学校」を差別化していくためのキー・ポイントは、宇野氏は「銀座」という街にこだわることにあると考えている。彼は、銀座は、日本全国そして世界に情報発信できるポジションにある希有の場所であると考え。そこで銀座の街全体を一つのステージとして捉え、トータルで「銀座・大人の学校」を含めた諸イベントをコーディネートしていくこと、そしてその活動の中に、銀座の街全体を取り込んでいくことによって、銀座と「文化パステル」の活動とを密接不可分な関係にしていこうと考えている。その計画の一環として宇野氏は、1968年から毎年開催されている「大銀座まつり」の中に「文化パステル」のイベントを組み込んでいけないか検討を始めている。
30

[付属資料 1]

会社の概要

主要な経営指標等の推移

回次	第92期	第93期	第94期	第95期	第96期
決算年月	平成4年3月	平成5年3月	平成6年3月	平成7年3月	平成8年3月
売上高	388,674百万円	400,449百万円	391,085百万円	393,896百万円	391,265百万円
経営利益	32,212百万円	32,390百万円	32,422百万円	32,697百万円	30,918百万円
当期純利益	15,082百万円	15,170百万円	15,242百万円	14,866百万円	14,268百万円
資本金 (発行済株式総数)	36,193百万円 (354,110)	43,241百万円 (400,215)	43,241百万円 (400,215)	43,241百万円 (400,215)	43,241百万円 (400,215)
純資産額	264,229百万円	289,232百万円	299,969百万円	310,026百万円	319,186百万円
総資産額	440,958百万円	464,957百万円	454,141百万円	469,509百万円	476,987百万円
自己資本比率	59.9%	62.2%	66.1%	66.0%	66.9%
1株当り純資産額	746.18円	722.69円	749.52円	774.65円	797.54円
1株当り配当額 (1株当り中間配当額)	11.00円 (5.50)	11.00円 (5.50)	11.00円 (5.50)	12.50円 (6.25)	12.50円 (6.25)
1株当り当期純利益	46.69円	38.77円	38.09円	37.15円	35.65円
潜在株式調整後 1株当り当期純利益					—円
配当性向	24.3%	29.0%	28.9%	33.6%	35.1%
従業員数	3,605人	3,671人	3,734人	3,915人	4,185人
連結売上高	553,299百万円	561,548百万円	549,178百万円	540,361百万円	560,820百万円
連結経常利益	40,628百万円	35,364百万円	33,534百万円	27,972百万円	35,339百万円
連結当期純利益	16,011百万円	13,289百万円	14,668百万円	11,381百万円	17,506百万円
連結純資産額	304,806百万円	327,271百万円	338,658百万円	346,121百万円	357,791百万円
連結総資産額	600,200百万円	602,064百万円	568,242百万円	564,315百万円	580,443百万円
連結ベースの1株当り 純資産額	869.07円	822.13円	848.13円	865.79円	894.98円
連結ベースの1株当り 当期純利益	50.11円	41.60円	36.81円	28.49円	43.79円
連結ベースの潜在株式調整後 1株当り当期純利益					—円

- (注) 1. 売上高及び連結売上高には、消費税は含まれておりません。
 2. 第96期中間配当に関する取締役会議年月日 平成7年10月27日
 3. 第96期の潜在株式調整後1株当り当期純利益及び連結ベースの潜在株式調整後1株当り当期純利益は、調整計算の結果、1株当り当期純利益金額が希薄化しないため、記載しておりません。

[付属資料 2]

6年間の概況

	百万円						千米ドル
	1997	1996	1995	1994	1993	1992	1997
売上高	588,572	560,821	540,361	549,178	561,548	553,299	5,118,017
売上原価	197,803	183,887	169,164	173,441	175,116	169,995	1,720,026
販売費及び一般管理費	347,871	339,922	344,707	345,712	353,742	342,936	3,024,965
営業利益	42,898	37,012	26,490	30,025	32,690	40,368	373,026
当期純利益	19,152	17,507	11,382	14,668	13,289	16,012	166,539
年度末							
流動資産	299,121	283,964	254,318	239,850	252,540	236,939	2,601,052
総資産	610,132	580,513	564,383	568,402	602,431	600,833	5,305,496
流動負債	161,868	188,189	151,417	160,402	204,719	235,279	1,407,548
短期借入金	13,736	50,055	18,986	29,244	65,267	84,224	119,444
長期借入金	27,911	2,551	33,546	33,179	32,969	23,659	242,704
株主資本	388,145	357,861	346,190	338,819	327,637	305,437	3,375,174

一株当たりデータ(円、ドル)

当期純利益	47.5	43.7	28.4	36.7	33.7	41.8	0.14
配当金	12.5	12.5	12.5	11.0	11.0	11.0	0.11

期中平均株式数(千株)	403,236	400,215	400,215	400,215	394,868	383,144	
-------------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	--

主な財務指標

営業利益率(%)	7.3	6.6	4.9	5.5	5.8	7.3	
売上高当期純利益率(%)	3.3	3.1	2.1	2.7	2.4	2.9	
総資産当期純利益率(%)	3.2	3.1	2.0	2.5	2.2	2.7	
株主資本当期純利益率(%)	5.1	5.0	3.3	4.4	4.2	5.6	
株主資本比率(%)	63.6	61.6	61.3	59.6	54.4	50.8	
流動比率(倍)	1.85	1.51	1.68	1.50	1.23	1.0	
デット・エクイティ・レシオ(倍)	0.11	0.15	0.15	0.18	0.30	0.3	
配当性向(%)	26.5	28.6	41.3	29.9	33.1	22.9	

注：米ドル表示は便宜上のものであり、1997年3月31日現在の概算為替レートである1米ドル=115円で換算しております。

事業別売上高

(および売上高比)

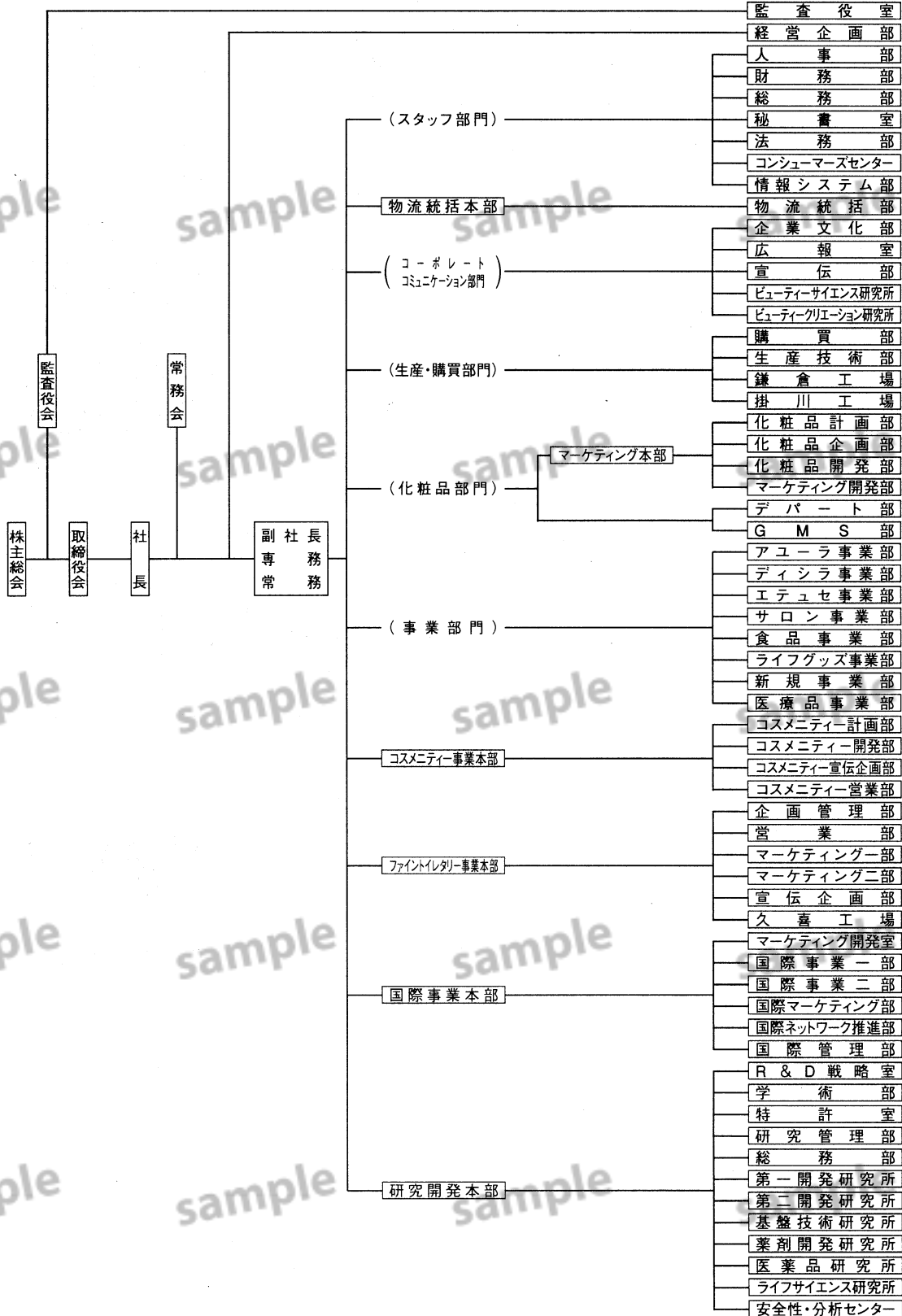
	百万円					千米ドル
	1997	1996	1995	1994	1993	1997
化粧品事業	436,705	404,181	387,314	390,188	376,673	3,797,435
	(74.2%)	(72.1%)	(71.7%)	(71.0%)	(67.1%)	(74.2%)
女性用	328,807	312,772	304,779	308,630	303,040	2,859,191
男性用	47,910	46,919	48,277	50,772	45,175	416,609
海外	59,988	44,490	34,258	30,786	28,458	521,635
トイレットリー事業	94,610	101,675	97,606	102,132	108,095	822,695
	(16.1%)	(18.1%)	(18.1%)	(18.6%)	(19.2%)	(16.1%)
その他の事業：サロン、食品、医療品事業ほか	57,257	54,965	55,441	56,858	76,780	497,887
	(9.7%)	(9.8%)	(10.2%)	(10.4%)	(13.7%)	(9.7%)
売上高	588,572	560,821	540,361	549,178	561,548	5,118,017
	(100.0%)	(100.0%)	(100.0%)	(100.0%)	(100.0%)	(100.0%)
海外売上高	64,549	50,432	40,283	37,211	35,878	561,296

注：連結財務諸表作成に関する日本の会計基準の改訂に伴い、資生堂は、1994年度より、事業別売上高の算出方法を変更いたしました。1994年度より以前の決算への遡及的修正は行っておりません。新基準で算出した場合の1993年度の売上高構成は以下の通りです(未監査)。
化粧品事業…398,419百万円 トイレットリー事業…103,682百万円 その他の事業…59,447百万円 売上高…561,548百万円

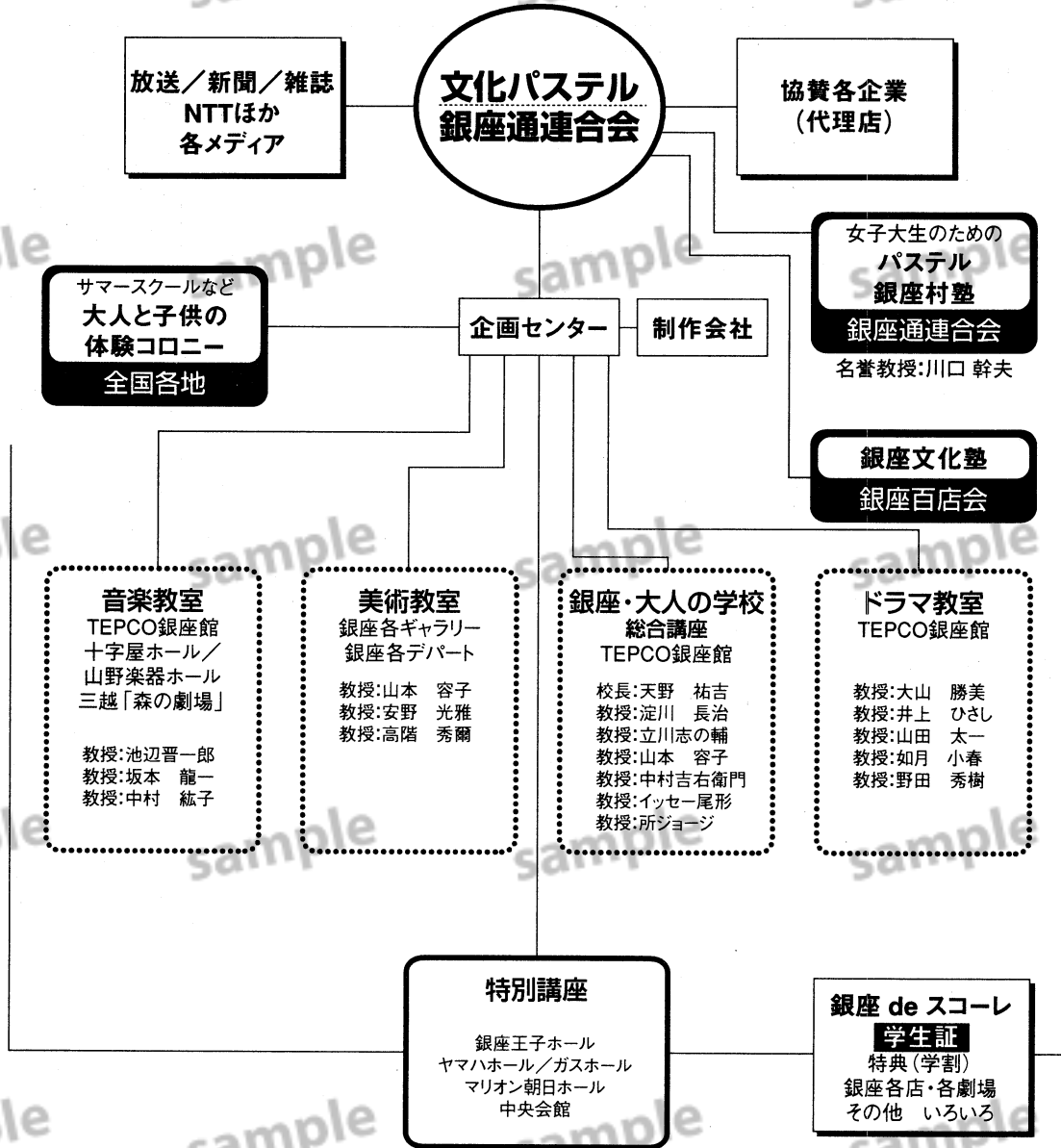
[付属資料 3]

資生堂

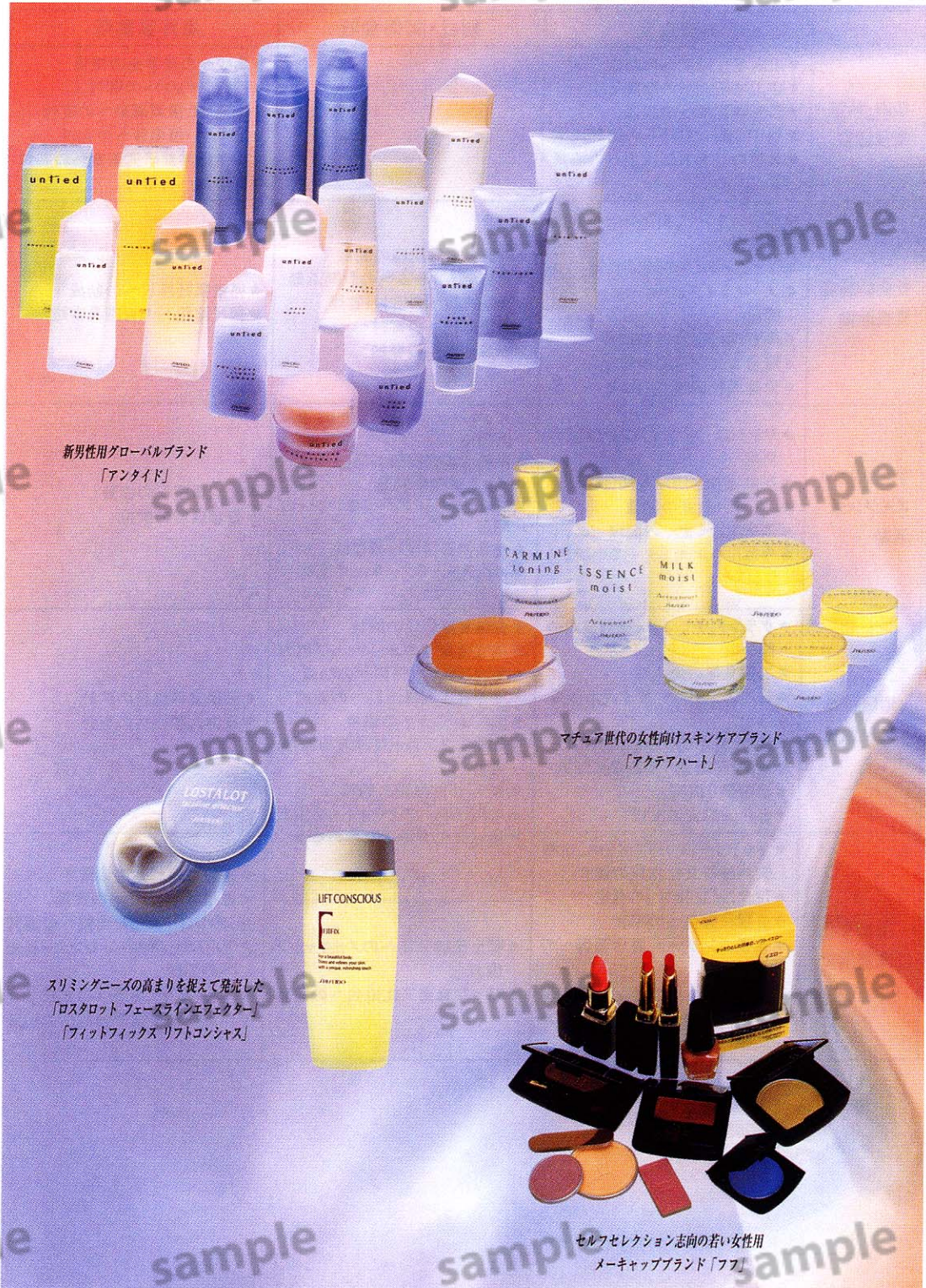
注：平成8年6月27日現在では、以下のとおり変更しております。



文化パステル【銀座 de スコアレ】チャート(案)



[付属資料 5]

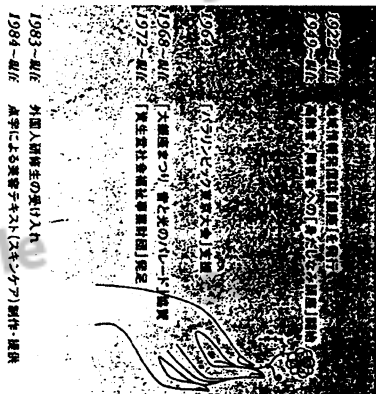


96年度社会貢献活動実績

	株資生堂	販社・関係会社	海外事業所
学術・教育 支援活動	<ul style="list-style-type: none"> ●皮膚老化研究への助成 ●理工学研究への助成 ●若手研究者への支援 ●香り関係イベントへの講師派遣 ●大学の社会貢献講座への協賛 		<ul style="list-style-type: none"> ●高校への奨学金の提供 ●教育ファンドへの寄付 ●小児マヒ撲滅運動への寄付 ●アメリカ・癌協会への寄付 ●大学医学部研究基金への寄付 ●図書館への寄付
社会的弱者 支援活動	<ul style="list-style-type: none"> ●点字テキスト、点字シール作成提供 ●ファインライスの製造販売 ●ノーマライジングメーカーシップの開発 ●障害福祉施設への寄付 ●障害者美容講座の開催 ●児童福祉施設への助成 	<ul style="list-style-type: none"> ●障害者美容講座の開催 ●特養老人ホームへの慰問活動 ●福祉施設への寄付・寄贈 ●養護学校への寄付 ●献血運動への参加 	<ul style="list-style-type: none"> ●児童福祉施設への助成 ●福祉施設への介護品寄贈
サクセスフル エイジング 活動	<ul style="list-style-type: none"> ●サクセスフル エイジング情報の発信 ●高齢者美容講座の開催 ●おしゃれ教室の開催 ●消費者セミナーの開催 ●ウエルネス セミナーでの講演 	<ul style="list-style-type: none"> ●サクセスフル エイジングセミナーの開催 ●高齢者美容講習の開催 ●ミセス講座の開催 ●フレッシュレディー セミナーの開催 ●生涯学習講座への参画 ●カルチャースクールへの支援 	<ul style="list-style-type: none"> ●女性講座への協賛 ●整容講座の開催
地域社会 貢献活動	<ul style="list-style-type: none"> ●グラウンド、テニスコート等施設の開放 ●工場見学の受入れ ●日本海タンカー重油流出救援活動 ●銀座・並木通り商店振興活動 ●銀座・花椿通り商店振興活動 ●銀座祭り協賛 ●各種国際交流支援 	<ul style="list-style-type: none"> ●会議室等施設の開放 ●地域祭事へのメーカーシップ協力 ●地域スポーツ振興への助成 ●地域美化清掃活動への参加 ●地域イベントへの協賛 ●日本海タンカー重油流出救援活動 ●グラウンド等施設の開放 ●地域祭事へのメーカーシップ協力 ●地域美化清掃活動への参加 	<ul style="list-style-type: none"> ●会議室等施設の開放 ●日本人学校への寄付
芸術文化 支援活動	<ul style="list-style-type: none"> ●ギャラリー、アートスペース、企業資料館等文化施設の運営 ●現代詩「花椿賞」の選定 ●各種展覧会への協賛 ●各種コンサート、舞台芸術への協賛 ●各種ファッションイベントへの支援 ●芸術文化創作、発表活動への支援 	<ul style="list-style-type: none"> ●郷土伝統芸能へのメーカーシップ協力 ●様々な音楽文化協会への協賛 	<ul style="list-style-type: none"> ●各種美術展への協賛 ●各種コンサートへの支援 ●フランス・スリー音楽祭への協賛 ●アメリカ・リンカーンセンター基金への協賛 ●ニューヨーク開展への支援 ●米国女性芸術博物館への協賛

資生堂の社会活動の足跡

福祉・地域社会活動



1983-84年 外国人留学生の受け入れ
1984-85年 赤字による美容テキストブック(スキンケア)制作・提供

1986-87年 赤字による美容テキストブック(スキンケア)制作・提供

1987-88年 技術指導者用美容情報テキスト 制作・提供

1991-92年 低アレルギーマスク「アレルギアス」の開発

1992-93年 あさやまいしみの化粧品法の開発
1992-93年 社会福祉活動「美容師協会の社会活動」開始
1992-93年 資生堂アートのボランティアチームのスタート
1993-94年 「アレルギアス」マスクの製造・導入

1995 阪神大震災被災者支援
1995 阪神大震災被災者住宅における美容講習
1995-96年 「東宝堂バーベキュー」販売

1997 「バリエーション」美容大会」支援
1997 「厚生大臣表彰」受賞
1997 「注目の企業」の選出
1997 社員「海外ボランティア」活動体制構築開始
1997 日本海沿岸一帯の震災被災者支援
1998 朝日新聞文化財団(公益の社会貢献活動)で特別賞を受賞

学術支援活動



1967-68年 日本皮膚科学会基礎医学研究奨励会

1972 第1回厚生堂国際会議「光と皮膚の化学」開催
1980 第2回厚生堂国際会議「皮膚と化粧品科学」開催

1985 第3回厚生堂国際会議「肌科と皮膚」開催

1989-90年 ハーバード大学皮膚科学研究所設立・共同研究開始
1990 「やけどを克服するために」を翻訳出版

1991-92年 「厚生堂皮膚老化研究プロジェクト」を設立

1992 厚生堂創業120周年記念科学シンポジウム
「ヒューマン・ヘルス・サイエンスと皮膚」開催
1992 分子細胞生化学国際シンポジウム
「肌、皮膚、免疫系に共通するメカニズム」開催
1994-95年 厚生堂理工学研究拠点

1996-97年 日本研究員科学会外国人留学生奨励会
「厚生堂サイエンスフォーラム 97」
「皮膚」生体のメカニズム「メカニズム」開催

ササニエスエスエス活動



1989 厚生堂国際フォーラム 99「ササニエスエスエス」開催
1989 「髪くまを落とす」出版開始
1990 「アレルギアス」マスクの製造開始

1991 「ササニエスエスエス」の製造開始

1993 「ササニエスエスエス」の製造開始

1995 厚生堂フォーラム 95「ササニエスエスエス」の製造開始

1996 厚生堂フォーラム 96「ササニエスエスエス」の製造開始
1996 「ササニエスエスエス」の製造開始

芸術文化支援活動

1919-84年 厚生堂ギャラリー開設
1923-33 「厚生堂月報」発行
1928-1931 「厚生堂美術展覧会」
1933-37 「厚生堂クラフト」発行
1937-41 「花柳」発行
1947-84 「ゆき屋」(厚生堂ギャラリー)
1962-84 「日本道楽家協会」支援

1975-1985 「ササニエスエスエス」開設
1975-1995 「現代工芸展覧会」(厚生堂ギャラリー)
1977 「6人の心」開催

1978-84年 厚生堂アートの国際展
1983-84年 「現代美術展覧会」開催
1983 映画「厚生堂のチキンスピリット」制作
1984-84年 「山崎公彦」展覧
1985 「厚生堂広告芸術展」(ニューヨーク)
1985 「ササニエスエスエス」開設

1986 「厚生堂の東に伝説」(1972-1986)開催
1986 「新編 芸術の日本」(1910-1970)開催
1986 「アレルギアス」マスクの製造開始
1986 「アレルギアス」マスクの製造開始

1987 厚生堂ギャラリー「レミゼラブル」展覧
1989 映画「カミュ」制作
1990 厚生堂企業文化財団
1990 「アレルギアス」マスクの製造開始

1991-84年 「アレルギアス」マスクの製造開始

1991 「アレルギアス」マスクの製造開始
1991 「アレルギアス」マスクの製造開始
1992-84年 海外派遣日本人作家紹介展開始(厚生堂ギャラリー)
1997 PARIS-TOKYO-PARIS SHISEIDO 1897-1997 LA BEAUTE 開催(VI)

1970-84年 東京国際女子クラフト展覧会
1987-84年 SHISEIDO CUP 開催(厚生堂ギャラリー)



[付属資料 8]

地域社会活動

培ってきたものを活用し、福祉や地域社会の一員



ボランティア功勞者に対する厚生大臣表彰
資生堂は、視覚障害者の方々への美と健康に関する情報提供と老人ホーム等福祉施設における美容講座の開催を継続的に行ってきました。このことが評価され、97年に「ボランティア功勞者に対する厚生大臣表彰」を受賞しました。



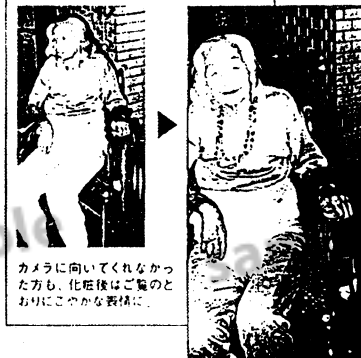
おしゃれなひととき
年4回の季節にあわせた美容情報カセットテープ。全国の点字図書館に寄贈しています。



福祉施設での身だしなみ講座
リハビリテーションへの意欲向上にもつながり、医療分野からも注目されています。

TOPICS

化粧の医学的効果
近年、化粧が高齢者の方々に与えるポジティブな効果に注目が集まっています。素顔に口紅を塗り、ネックレスを身に付けただけで、高齢者の方の表情がバツと明るくなり、行動も前向きになるなどの変化が現れたというケースや、徳島県の病院で女性の患者さんにメーキャップの指導をしたところ、寝たきりの患者さんが自分で歩けるまでに回復したというケースなど、「化粧療法」とも言うべき試みに、医療関係者の関心が高まっています。



カメラに向けてくれなかった方も、化粧後はご自身のとりにこのかな表情に。

人が一人では生きていけないのと同じように、企業も社会とともにしか生きていけない存在です。資生堂の福祉活動は、事業を行う過程で培ってきた固有の技術・ノウハウ・資産を活用する形で行われています。それが最も長続きし、しかも無理がなく、効果も上がる方法だと考えているからです。

視覚に障害がある方々を対象とした点字、拡大文字、音声を活用した様々なサービスを全国で展開しています。

具体的には、点字ラベルのシールを化粧品の容器に貼り付け、商品の識別を容易にしたことや、点字や拡大文字を使用した美容テキスト(スキンケア編とメーキャップ編)の発行、さらには、「おしゃれなひととき」と題された美容情報テープの制作・提供があげられます。

美容情報テープは、美容、流行、ファッション、健康、音楽などの情報を収録した60分テープで、シーズン情報を折り込んで年4回制作され、全国100カ所の点字図書館に寄贈されています。年間約5,000人に利用されており、貸し出し件数で第1位となるなど大変好評を得ています。

高齢者や障害のある方々を対象とした「身だしなみ講座」を継続して開催し、生活のほりや意欲の向上などに貢献しています。

高齢者や障害者の方々を対象とした「身だしなみ講座」の開催・運営も同じ考えのもとに行われています。この活動は1949年ごろより支社単位で行われていた活動が全社的に拡大したもので、現在では年間3万人もの参加者を集める大きな活動に成長しました。専門家の方々からも、リハビリテーション効果がある、日常生活で意欲が向上するなどの評価を得ています。

資生堂は、上記のような継続した活動が評価され、1997年度の「ボランティア功勞者に対する厚生大臣表彰」を受賞しました。



点字シール(左)・点字テキスト(下)

[付属資料 9]

文化パステル：今までの主な活動と参加出演者

- ◇1987年10月～88年 5月 毎月1回開催「文化パステルサロン」 於：ホテル三条苑
・東京新聞との共催で、世代間の交流をテーマとしたトークサロン。
【山田太一、加藤登紀子、加東康一、筑紫哲也、川口幹夫助】
- ◇88年11月 9日 21:00～23:00 日本テレビ系ネット ドラマ「バラ」
・大人の純愛物語、今時珍しい中高年向け企画で、話題を呼ぶとともに内館牧子が、シナリオライターとして脚光をあびるきっかけともなった。
【主演：岸 恵子／菅原文太 原作：曾野綾子 プロデュース：嶋田親一】
- ◇88年12月～89年 3月 「朝日生命加チャースクール ～文化パステルトークコンサート～」 7回シリーズ
・昭和から平成へと移行する時期を意識し、トークコンサートの構成で時代を考へた。
【三國一朗、市川森一、池部 良、草笛光子、秋元 康助】
- ◇89年 8月～93年 隔月1回開催「文化パステルトークサロン」 於：池袋三越
【椎名 誠、宮崎 緑、磯村尚徳、篠田正浩、中村敦夫、桐島洋子、ねじめ正一、神津善行、宮川 泰、佐藤陽子、藤村志保助】
- ◇89年 8月～95年 月1回開催「文化パステル音楽サロン」 於：池袋三越
・〈楽器シリーズ〉や〈世界の都市：歌の旅シリーズ〉などとして、クラシックを楽しく分かり易いワチャコンサート形式で・・・（企画・解説：大塚修造）
【井上圭子、姜 建華、李 暁元、内藤敏子、塩田美奈子助】
- ◇90年 9月 「サウンドマップ 京都」 J R東海レジャーファミリーシリーズの制作協力（P：大山勝美）
・古都の散歩道12シリーズを、歩きながら楽しめる知識ガイドとして。
【ナレーション：渡辺美佐子、監修：大河内昭爾、協力：梅原 猛】
- ◇92年 9月、93年10月 「ジャパン ウィルトン シンフォニー オーケストラ コンサート」 於：渋谷オールドホール
（主催：メトロポリタン、企画：三枝成彰／大友直人、協力：文化パステル）
・在京9オーケストラのコンサートマスター・首席奏者を中心にメンバー構成された 夢のコンサート。
- ◇93年 8月 毎日曜夜、3回シリーズ：NHK-BSII「カルチャーマガジン」企画制作。
・大人の、そして専門的視点から掘り下げた〈文化情報番組〉
【ナビゲーター：ニナ・アニアツクリ、千葉美加、麻美れい、春風亭小朝、朝倉 摂、青島美幸、おすぎ、三浦雅士、三枝成彰、天野祐吉助】
- ◇94年 3月 J R東日本文化財団主催「芭蕉没後 300年記念企画 シンポジウム」への協力。
【多田道太郎、嵐山光三郎、浅井慎平、中沢新一、大山勝美助】
- ◇94年 4月24日 NHK-BSII「世界 わが心の旅・月にアザラシが棲む国」企画制作。
・真冬の北極圏を訪ね、風景や文化を通して見つめた、ヒューマンドキュメント。
【旅人：日比野克彦、総合TVにて翌年 1月 5日夜再放送】
- ◇95年 3月 読売新聞社主催「世界遺産フォーラム '95」への協力
【基調講演：森本哲郎 4/19 付の読売新聞にて詳細紹介】

Floor Guide

楽しさと情報がいっぱい。
毎月、多彩なイベントを取り揃えて
お待ちしております。



●バーチャルミュージック・シアター
空を思い通りに飛ぶ疑似体験が
できる世界初の4面立体映像シア
ターを用いて、原子力発電所の仕
組みや発電から消費までの電気の
道しるべを、空撮映像やコンピュータ
グラフィックにより詳しく紹介します。

●マルチメディア・ライブラリー
約3000冊で構成する「エネルギー
のデータベース」にアクセスし、エネ
ルギーの生産から消費までの様々な
情報がキッズでできます。

●電気のおるまじコーナー
電流立地地域の展示紹介を、
大型モニターでご覧いただけます。

●エレクトロニック・ミュージック
音楽が創る風景を、内外
の優れた楽器で紹介します。

●トランス・イナクス・ギャラリー
航空気象のアーティスト
たちの作品を中心に展示
します。

●アグリファム・1
水鏡側面の開口部から手
を入れて、鳥のふれあい
が楽しめます。

●アグリファム・2
コンピュータグラフィックで
よみがえった動物たちが
あなたの手に反応します。

●クッキングサロン
オリジナル電化のキッチンで、
料理教室を開催します。
※申し込みはイベント案内
「Choice」をご覧ください。

文化バステルは、文化へのさまざまな「思い」「志」を持った人びとが、ジャンルや所属(肩書)を超え、自由意思で集まった超党派で非営利のプロデュース集団です。活動資金は参加アーティストのご協力と、支援会社のメセナ(文化支援)によって賄われています。

特にメンバー制を設けておりませんが、87年の発足以来、次の方々をはじめ多くの参加を頂きました。今後も、さらにご協力を呼びかけ、スコアの輪を広げてまいります。

阿木 翁助	椎名 誠	淀川 長治	梅原 猛
森本 哲郎	ねじめ正一	小森 和子	多田道太郎
川口 幹夫	桐島 洋子	山川 静夫	大河内昭爾
大山 勝美	藤村 志保	草野 仁	島田 晴雄
天野 祐吉	渡辺美佐子	朝倉 拱	木村尚三郎
山田 太一	米倉斉加年	日比野克彦	加藤 周一
浅井 慎平	池部 良	佐藤 陽子	吉田 秀和
篠田 正浩	野田 秀樹	多田 和弘	磯村 尚徳
岸 恵子	如月 小春	大塚 修造	筑紫 哲也
島森 路子	三國 一朗	北村 源三	辻 邦生
三枝 成彰	やなせたかし	井上 圭子	福原 義春
池辺晋一郎	秋元 康	塩田美奈子	樋口廣太郎
市川 森一	神津 善行	岡田 修	根本長兵衛
内館 牧子	神津カンナ	宮川 泰	西崎 哲郎
嶋田 親一	菅原 洋一	服部 克久	小林山紀子
伊藤 強	加藤登紀子	森田 公一	永井多恵子
菅原 文太	麻実 れい	玉置 宏	宮崎 緑
倉内 均	春風亭小朝	千葉 美加	小池百合子
岩淵 潤子	内海 桂子	サイ・ヒロコ	三枝 進
さとう宗幸	内海 好江	サンディー	黒木 利夫
草笛 光子	おすぎ	姜 建華	石井 成洋
富士真奈美	三浦 雅士	李 暁元	鶴岡 弘康
樹木 希林	阿川佐和子	コリス・ブル	宇野 弘恭
青島 美幸	松山 香織	フアンソワ・ヌ・モレシヤン	
林 冬子	山本 寛斎	ア・ブ・スベナー	
林 海象	嵐山光三郎	ニナ・アナーシグ(リ)	
島井 守幸	勅使川原三郎	アグ(アド・ルグー)	(順不同・敬称略)

[付属資料12]

内部資料

《銀座 de スコアレ: 青少年赤十字75周年・赤十字奉仕団50周年記念

♪♪チャリティー スコアレコンサート企画案》

日 時: 98年10月26日(月) 19:00 ~ 21:10

於 : 銀座王子ホール

主 催: 日本赤十字社/銀座通連合会

【ご臨席予定: 美智子皇后様 皇太子ご夫妻】

後 援: 各国大使館様

特別協賛: 資生堂/TEPCO 銀座館/王子製紙様

協賛: 銀座各企業・各店

企 画: 文化バスル/ア・コレクション

協 力: 読売広告社

◇ 放送予定: NHK-BS II 「クラシック777」 & ニュース

【構成案】

司会: 山村美智子

△ 第1部

各国大使夫人の、楽しいお話と演奏。

(30分)

- ・フルート: エレン・ビョルネビー(ノルウェー)
- ・ソ・フィドゥ: マリア・ポミアノフスカ(ポーランド)
- ・ハーブ: 三宅美子

(休憩15分)

△ 第2部

『フィルハーモニア・カルテット・ベルリン』

(75分)

解説: 池辺晋一郎

曲目: ① クラシックの名曲 (40分)

② 「さくらさくら交奏曲」 (15分)

(池辺晋一郎、林 光など5名の作曲による編曲)

(休憩10分)

③ 国際赤十字が募集し、入選したボスニア少年の
“詩” に作曲して、新曲発表演奏 (20分)

[所要時間 130分]

【構成: 宇野弘恭 / 演出: 大山勝美 / 監修: 川口幹夫】

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

sample

不 許 複 製

慶応義塾大学ビジネス・スクール

情報99.4・P100